



# 館長だより

山形県産業科学館

令和8年1月14日(水)

発行 館長 加藤智一

## 成人の日



年山形県では、平成元年以降、最低となる9,461人が成人式を迎えます。とは言っても、成人式の実施日は市町村によってまちまちで、1月11日（日）に行ったのは、山形市、鶴岡市をはじめとする6市町で、8月14日又は15日に行う市町村は22を数え最も多く、その他3月21日（土）上山市、4月29日（水）朝日町、高畠町、5月3日又は4日に他4市町村となっています。

ところで、なぜ1月に「成人」を祝うのか？考えたことがありますか。そこには、意外と知られていない歴史と文化の積み重ねがあるのです。成人の日の起源をたどると、戦後間もない1946年、埼玉県蕨市で開かれた「青年祭」に行き着きます。荒廃した日本で、若者たちに希望と自信を取り戻してもらおうと企画されたこの行事が全国に広まり、1948年に国民の祝日として制定されました。祝日法では「大人になったことを自覚し、自ら生き抜こうとする青年を祝い励ます」ことが趣旨とされています。つまり、

「成人の日」は「社会の一員として歩み出す覚悟」を祝う日なのです。では、なぜ1月なのか。実は、制定当初の「成人の日」は1月15日と固定されていました。これは古来の「小正月」に由来するものです。平安時代の貴族社会では、男子が12~16歳で行う元服の儀式があり、これが成人式の源流とされます。元服は髪型を整え、冠をつけ、幼名から大人の名へと改める厳粛な儀式でした。女性にも裳着という通過儀礼があり、衣装を改めることで大人として認められました。こうした「大人になる儀式」が小正月に行われていたことから、1月15日が「成人の日」に選ばれたらしいのです。

しかし2,000年、ハッピーマンデー制度の導入により、「成人の日」は「1月の第2月曜日」に変更されました。これにより毎年日付が変わるようになり、三連休が生まれたことで帰省しやすくなり、観光需

要も高まりました。とはいっても、かつての「1月15日」という固定日を懐かしむ声も根強く、祝日が移動することにより、元服の伝統的な意味合いが薄れたを感じる人もいることでしょう。

成人式そのものも、時代とともに姿を変えてきました。戦後の青年祭から始まり、自治体主催の式典が全国に広がったのは1950年代以降。高度経済成長期には、成人式は「若者の門出を祝う国家的イベント」として定着しましたが、近年は、成人年齢が18歳に引き下げられたこともあり、「式典は18歳で行うべきか、20歳で行うべきか」という議論も起きました。実際には、受験や就職活動の時期と重なるため、全国の自治体の約9割が従来どおり20歳で式典を行っています。名称も「成人式」から「二十歳のつどい」へと変える自治体が増えているようです。

さてここで、もう少し「成人の日」の意義を深掘りしてみましょう。成人とは何か？元服の時代から現代まで一貫しているのは、「成人とは自由を得ることではなく、責任を担うこと」という考え方です。武家社会では、元服を終えた若者は刀を帯び、家名を背負い、主君に仕える資格を得ました。江戸時代の庶民にとっても、地域の行事や仕事に正式に参加することが「一人前」の証だったのです。成人とは、共同体の一員として認められる瞬間だったのです。現代の成人式でも、式辞には「社会の一員としての自覚」「責任ある行動を」というメッセージが繰り返される。こ

れは、古代から続く価値観の延長線上にあると考えられます。「成人の日」は、単に年齢の節目を祝う日ではなく、「これからどう生きるか」を問い直す日でもあるということなのです。

令和8年  
山形市二十歳の祝賀式

## 奇跡∞軌跡 ～行く山形の若葉たち～

令和8年1月11日(日)  
山形市総合スポーツセンター  
入場開始：午後0時30分～  
(オープニングイベント 午後1時30分～)  
開式：午後1時45分～

式次第

1 国歌のとき  
2 国旗斉唱  
3 山形市民の歌齊唱  
4 お祝いのことば  
5 結婚のことば  
6 「これまでのライフルガ」  
7 二十歳の決意「これからライフルガ」  
8 閉式のことば

來「ライフルガ」：一人ひとりの歩みの記録

主催：山形市・山形市教育委員会

パンフレットデザイン：二十歳の祝賀式実行委員会 片桐灰希

二十歳の祝賀式実行委員会

山形市議会議長 丸子善弘

二十歳の祝賀式実行委員会

二十歳の祝賀式実行委員会